

文づかひ

森鷗外

青空文庫

それがしの宮の催したまひし星が岡茶寮の独逸会に、洋行がへりの将校次を逐うて身の上ばなしせし時のことなりしが、こよひはおん身が物語聞くべきはずなり、殿下も待兼ねておはすればと促されて、まだ大尉になりてほどもあらしと見ゆる小林といふ少年士官、口に啣へし巻烟草取りて火鉢の中へ灰振り落して語りは始めぬ。

わがザックセン軍団につけられて、秋の演習にゆきし折、ラアゲキツツ村の辺にて、對抗は既に果てて仮設敵を攻むべき日とはなりぬ。小高き丘の上に、まばらに兵を配りて、敵と定めおき、地形の波面、木立、田舎家などを巧に楯に取りて、四方より攻寄するさま、めづらしき壯觀なりければ、近郷の民ここにかしこに群をなし、中に雜りたる少女らが黒天鵝絨の胸当晴れがましう、小皿伏せたるやうなる縁狭き笠に草花插したるもをかしと、携へし目がね忙はしくかなたこなたを見廻らすほどに、向ひの岡なる一群きは立てゆかしう覚えぬ。

九月はじめの秋の空は、けふしもここに稀なるある色になりて、空気透徹りたれば、残る隈なくあざやかに見ゆるこの群の真中に、馬車一輛停めさせて、年若き貴婦人いくたりか乗りたれば、さまざまの衣の色相映じて、花一叢、にしき一団、目もあやに、

立ちたる人の腰シエルベ帯、坐りたる人の帽ぼうの紐ひもなどを、風ひらひらと吹ふ靡きなびかしたり。その傍かたわらに馬立てたる白髪おきなの翁つは角扣つのボタン紐ひもどめにせし緑かきの獵人かりゆうど服ふくに、うすき褐かちいろの帽いを戴いたけるのみなれど、何となく由よしありげに見ゆ。すこし引下がりて白こき駒こま控へたる少女おとめ、わが目がねはしばしこれに留たままりぬ。鋼鉄はがねいろの馬うまのり衣裾ころもそな長ながに着て、白こき薄絹うすきぬ巻きたる黒帽くろぼう子を被かぶりたる身の構かまえけだかく、今かなたの森蔭もりかげより、むらむらと打出でたる獵兵かりゆうべいの勇ゆうましさ見むとて、人々騒さわげどかへりみぬさま心憎こころにくし。

「殊ことなるかたに心留こころとめたまふものかな。」といひて軽かろく我肩わがかたを拍うちし長ながき八字髭はちじひげの明アロン色いろなる少年士官せうねんしうかんは、おなじ大隊だいたいの本部ほんぶにつけられたる中尉ちゆうゐにて、男だん爵しやくフォン・メルハイムといふ人なり。「かしこなるは我が識しれるデウベンデウベンの城しろのぬしビュロオ伯はくが一族いっしゆなり。本部ほんぶのこよひの宿しゆくはかの城しろと定さだまりたれば、君も人々に交まじりたまふたつきあらむ。」と言い畢いる時とき、獵兵かりゆうべいやうやわが左翼さよくに迫せまるを見て、メエルハイムは馳かけ去りぬ。この人と我が交まじりそめしは、まだ久ひさしからぬほどなれど、善よき性さがとおもはれぬ。

寄手よせて丘かみの下したまで進すすみて、けふの演習えんしゆをはり、例れいの審判しんぱんも果はつるほどに、われはメエルハイムと俱ともに大隊長だいたいぢやうの後しりえにつきて、こよひの宿しゆくへいそぎゆくに、中なか高たかに造つくりし「シヨツセエ」道美みちみしく切株きりく残のこれる麦畑むぎはたけの間まをうねりて、をりをり水音みづねの耳みみに入るは、木立こだちの彼方あなたを

流るるムルデ河に近づきたるなるべし。大隊長は四十の上を三つ四つも踰えたらむとおもはるる人にて、髪はまだふかき褐いろを失はねど、その赤き面を見れば、はや額の波いぢるし。質樸なれば言葉すくなきに、一一言三言めには、「われ一個人にとりては」とことわる癖あり。遽にメルハイムのかたへ向きて、「君がいひなづけの妻の待ちてやあらむ、」といひぬ。「許し玉へ、少佐の君。われにはまだ結髪いいなずけの妻といふものなし。」「さなりや。我言をあしう思ひとり玉ふな。イイダの君を、われ一個人にとりてはかくおもひぬ。」かく二人の物語する間に、道はデウベン城の前にいでぬ。園をかこめる低き鉄柵をみぎひだりに結びし真砂路一線に長く、その果つるところに旧りたる石門あり。入りて見れば、しろ木槿の花咲きみだれたる奥に、白堊塗りたる瓦葺の高どのあり。その南のかたに高き石の塔あるは埃及の尖塔エジプトピラミッドにならひて造れりと覚ゆ。けふの泊のことを知りて出迎へし「リフレエ」着たる下部に引かれて、白石の階のぼりゆくとき、園の木立を洩るゆふ日朱の如く赤く、階の両側に蹲りたる人首獅身の「スフィンクス」を照したり。わがはじめて入る独逸貴族の城のさまいかならむ。さきに遠く望みし馬上の美人はいかなる人にか。これらも皆解きあへぬ謎なるべし。

四方の壁と穹窿まるとんじょう には、鬼神竜蛇さまさまの形を画き、「トルウへ」といふ長

櫃^{がびつ}めきたるものをとどころどころに据^すゑ、柱には刻^{きぎ}みたる獸^{けもの}の首^{こうべ}、古代の櫃^{たて}、打物^{うちもの}などを懸^かけつらねたる間^ま、いくつか過ぎて、楼^{ろうじょう}上^{じょう}に引^ひかれぬ。

ビュロオ伯は常の服とおぼしき黒の上衣^{うわぎ}のいと寛^{ひろ}きに着^き更^がへて、伯爵夫人とともにここにをり、かねて相識^{あひし}れる中なれば、大隊長と心よげに握手し、われをも引合はさせて、胸の底より出づるやうなる声にてみづから名告^なり、メエルハイムには「よくぞ来玉ひし、」と軽く会^え釈^{しゃく}しぬ。夫人は伯よりおいたりと見ゆるほどに起居^{たぢい}重^{おも}けれど、こころの優^{やさ}しき目^まの色に出でたり。メエルハイムを傍^{かたわら}へ呼びて、何やらむしばしきさやくほどに、伯。

「けふの疲^{つか}れさぞあらむ。まかりて憩^{いこ}ひ玉へ。」と人して部屋^{いごな}へ誘^まはせぬ。

われとメエルハイムとは一つ部屋にて東向なり。ムルデの河波は窓の直下^{ました}のいしづゑを洗^{なが}ひて、むかひの岸の草むらは緑まだあせず。そのうしろなる柏^{かしわ}の林にゆふ霨^{もや}かかれり。流^{なが}めての方にて折れ、こなたの陸^く膝^かがしらの如く出でたるところに田舎家二、三軒ありて、真^ま黒^{くろ}なる粉^{こな}ひき車の輪^{なかとら}中空^{そび}に聳^{そび}え、ゆん手^てには水に枕^{のぞ}みてつき出したる高^{たか}殿^{どの}の一^{ひと}間^まあり。この「バルコン」めきたるところの窓、打見るほどに開きて、少女のかしら三つ四つ、をり置^かなりてこなたを覗^{のぞ}きしが、白き馬に騎^のりたりし人はあらざりき。軍服ぬぎて盥^{たらい}卓^{くえ}の傍^よへ倚^よらむとせしメエルハイムは、「かしこは若き婦人がたの居間なり、無^な礼^{れい}なれ

どその窓の戸疾くさしてよ、」とわれに請ひぬ。

日暮れて食堂に招かれ、メエルハイムと俱にゆくをり、「この家に若き姫たちの多きことよ、」と問ひつるに。「もと六人ありしが、一人はわが友なるフアブリス伯に嫁ぎて、のこれるは五人なり。」「フアブリスとは國務大臣の家ならずや。」「さなり、大臣の夫人はここのあるじの姉にて、わが友といふは大臣のよつぎの子なり。」

食卓に就きてみれば、五人の姫たちみなおもひおもひの粧したる、その美しさいづれはあらぬに、上の一人の上衣も裳も黒きを着たるさま、めづらしと見れば、これなんさきに白き馬に騎りたりし人なりける。外の姫たちは日本人めづらしく、伯爵夫人のわが軍服褒めたまふ言葉の尾につきて、「黒き地に黒き紐つきたれば、ブラウンシユワイヒの士官に似たり、」と一人いへば、桃色の顔したる末の姫、「さにてもなし、」とまだいわけなくもいやしむいろえ包までいふに、皆をかしさに堪へねば、あかめし顔を汗盛れる皿の上に低れぬれど、黒き衣の姫は睫だに動きざりき。暫しありて穉き姫、さきの罪購はむとやおもひけむ、「されどかの君の軍服は上も下もくろければイイダや好みたまはむ、」といふを聞きて、黒き衣の姫振向きて睨みぬ。この目は常にをち方にのみ迷ふやうなれど、一たび人の面に向ひては、言葉にも増して心をあらはせり。いま睨みしさまは笑を帯びて呵り

きと覚ゆ。われはこの末の姫の言葉にて知りぬ、さきに大隊長がメエルハイムのいひなづけの妻ならむといひしイダの君とは、この人のことなるを。かく心づきてみれば、メエルハイムが言葉も振舞も、この君をうやまひ愛づと見えぬはなし。さてはこの中はビュロオ伯夫婦もここに許したまふなるべし。イダといふ姫は丈高く瘦肉にて、五人の若き貴婦人のうち、この君のみ髪黒し。かの善くものいふ目をよそにしては、外の姫たちに立ちこえて美しとおもふところもなく、眉の間にはいつも皺少しあり。面のいろの蒼う見ゆるは、黒き衣のためにや。

食終りてつぎの間にいづれば、ここはちひさき座敷めきたるところにて、軟き椅子、「ゾファ」などの脚きはめて短きをおほく据ゑたり。ここに珈琲の饗応あり。給仕のをとこ小盞こさかずきに焼酎しょうちゆうのたぐひいくつか注いだるを持てく。あるじの外には誰も取らず、ただ大隊長のみは、「われ一個人にとりては『シャルトリヨオズ』をこそ、」とて一息に飲みぬ。この時わが立ちし背のほの暗きかたにて、「一個人、一個人」とあやしき声して呼ぶものあるに、おどろきて顧みれば、この間の隅にはおほいなる鍼がねの籠ありて、そが中なる鸚鵡おうむ、かねて聞きしことある大隊長のこと葉をまねびしなりけり。姫たち、「あな生憎あいにくの鳥や」とつぶやけば、大隊長もみづからこわ高に笑ひぬ。

主人は大隊長と巻烟草喫みて、銃獵の話せばやと、小部屋のかたへゆくほどに、われはさきよりこなたを打守りて、珍らしき日本人にもものいひたげなる末の姫に向ひて、

「このさかしき鳥はおん身のにや、」とゑみつつ問へば。「否、誰のとも定らねど、われも愛でたきものにこそ思ひ侍れ。さいつ頃までは、鳩あまた飼ひしが、あまりに馴れて、身に縋はるものをイイダいたく嫌へば、皆人に取らせつ。この鸚鵡のみは、いかにしてかあの姉君を憎めるがこぼれ幸にて、今も飼はれ侍り。さならずや。」と鸚鵡のかたへ首さしいだしていふに、姉君憎むてふ鳥は、まがりたる嘴を開きて、「さならずや、さならずや」と繰返しぬ。

この際にメエルハイムはイイダひめの傍に居寄りて、なに事をかこひ求むれど、渋りてうけひかざりしに、伯爵夫人も言葉を添へ玉ふと見えしが、姫つと立ちて「ピアノ」にむかひぬ。下部いそがはしく燭をみぎひだりに立つれば、メエルハイムは「いづれの譜をかまゐらすべき、」と樂器のかたはらなる小卓にあゆみ寄らむとせしに、イイダ姫「否、譜なくとも」とて、おもむろに下す指尖木端に触れて起すや金石の響。しらべ繁くなりまさるにつれて、あさ霞の如きいろ、姫が臉際に顕れ来つ。ゆるらかに幾尺の水晶の念珠を引くときは、ムルデの河もしばし流をとどむべく、忽ち迫りて刀槍齋く鳴ると

きは、むかし行旅を脅ししこの城の遠祖も百年の夢を破られやせむ。あはれ、この少女のこころは恒に狭き胸の内に閉ぢられて、こと葉となりてあらはるる便なれば、その織々たる指頭よりほとぼしり出づるにやあらむ。唯覚ゆ、糸声の波はこのデウベン城をただよはせて、人もわれも浮きつ沈みつ流れゆくを。曲正に闌になりて、この樂器のうちに潜みしさまさまの絃の鬼、ひとりびとりに窮なき怨を訴へをはりて、いまや諸声たてて泣響むやうなるとき、訝かしや、城外に笛の音起りて、たどたどしうも姫が「ピヤノ」にあはせむとす。

弾じほれたるイイダ姫は、暫く心附かでありしが、かの笛の音ふと耳に入りぬと覺しく遽にしらべを乱りて、樂器の筐も砕くるやうなる音をせさせ、座を起ちたるおもては、常より蒼かりき。姫たち顔見合せて、「また欠唇のをこなる業しけるよ。」とささやくほどに、外なる笛の音絶えぬ。

主人の伯は小部屋より出でて、「物くるほしきイイダが当座の曲は、いつものことにて珍らしからねど、君はさこそ驚きたまひけぬ、」とわれに会釈しぬ。

絶えしものの音が耳にはなほ聞えて、うつつごころならず部屋へ還りしが、こよひ見聞しことに心奪はれていもねられず。床をならべしメエルハイムを見れば、これもまだ醒

めたり。問はまほしきことはさはなれど、さすがに憚るところなきにあらねば、「さきの怪しき笛の音は誰が出ししか知りてやおはする、」と僅にいふに、男爵こなたに向きて、「それにつきては——一条のもの語あり、われもこよひは何ゆゑか寝られねば、起きて語り聞かせむ。」と諾ひぬ。

われらはまだ暖まらぬ臥床を降りて、まどの下なる小机にいむかひ、烟草煙らすほどに、さきの笛の音、また窓の外におこりて、乍ち断えたちまち続き、ひな鶯のこころみに鳴く如し。メエルハイムは警咳して語りいでぬ。

「十年ばかり前のことなるべし、ここより遠からぬブリヨオゼンといふ村にあはれなる孤ありけり。六つ七つするとき流行の時疫にふた親みななくなりしに、欠唇にていと醜かりければ、かへりみるものなくほとほと饑に迫りしが、ある日麵包の乾きたるやあると、この城へもとめに来ぬ。その頃イイダの君はとをばかりなりしが、あはれがりて物とらせつ。玩の笛ありしを与へて、『これ吹いて見よ、』といへど、欠唇なればえ銜まず。イイダの君、『あの見ぐるしき口なほして得させよ、』とむつかりて止まず。母なる夫人聞きて、幼きものの心やさしういふなればとて医師して縫はせ玉ひぬ。」

「その時よりの童は城にとどまりて、羊飼となりしが、賜はりしもてあそびの笛を

離さず、後にはみづから木を削りて笛を作り、ひたすら吹きならふほどに、たれ教ふるものなけれど、自然にかかる音色を出すやうになりぬ。」

「一昨年おとししの夏わが休暇たまはりてここに来たりし頃、城の一族とほ乗せむと出でしが、イダの君が白き駒こますぐれて疾く、われのみ継つきゆくをり、狭き道のまがり角にて、かれ草うづ高く積める荷車に逢ひぬ。馬はおびえて一躍し、姫は辛かろうじて鞍くらにこらへたり。わがすくひにゆかむとするを待たで、傍かたえなる高草の裏にあと叫ぶ声すと聞く間に、羊飼の童飛わらべぶごとくに馳はせよ寄り、姫が馬の轡くつわぎは緊しかと握りておし鎮しずめぬ。この童が牧場まきばのいとまだにあれば、見えがくれにわが跡慕あとしたふを、姫これより知りて、人してものかづけなどはし玉ひしが、いかなる故にか、目通めどおりを許されず、童も姫がたまたま逢ひても、こと葉かけたまはぬにて、おのれを嫌ひ玉ふと知り、はてはみづから避くるやうになりしが、いまも遠きわたりより守もることを忘れず、好みて姫が住める部屋の窓の下に小舟おがねつな繋ぎて、夜も枯草うちの裡うちに眠れり。」

聞きき畢おわりて眠ねむりに就くころは、ひがし窓の硝子ガラスはやほの暗うなりて、笛の音も断えたりしが、この夜イダ姫おも影に見えぬ。その騎のりたる馬のみるみる黒くなるを、怪しとおもひて善よく視みれば、人の面おもてにて欠唇なり。されど夢ごころには、姫がこれに騎りたるを、よ

のつねの事のやうに覺えて、しばしまた眺めたるに、姫とおもひしは「スフィックス」の首こっぺにて、瞳ひとみなき目なかば開きたり。馬と見しは前足おとなしく並べたる獅子ししなり。さてこの「スフィックス」の頭かしらの上には、鸚鵡おうむ止まりて、わが面を見て笑ふさまいと憎し。

つとめて起き、窓おしあくれば、朝日の光対むこうぎし岸しの林を染め、微風そよかぜはムルデの河づらに細紋をゑがき、水に近き草原には、ひと群の羊あり。萌黄色もえぎいろの「キツテル」といふ衣短く、黒き臍すねをあらはしたる童、身の丈たけきはめて低きが、おどろなす赤髪ふり乱して、手に持たる鞭むち面白げに鳴らしぬ。

この日は朝あしたの珈琲を部屋にて飲み、午頃ひる大隊長と俱ともにグリーンマといふところの銃獵仲間うたげの会堂にゆきて演習見に來たまひぬる国王の宴うたげにあづかるべきはずなれば、正服着て待つほどに、あるじの伯は馬車を借して階きざしの上まで見送りぬ。われは外国士官といふをもて、将官、佐官をのみつどふるけふの会に招かれしが、メエルハイムは城に残りき。田舎なれど会堂おもひの外ほかに美しく、食卓の器は王宮よりはこび来ぬとて、純銀の皿、マイセン焼すえの陶ものなどあり。この国のやき物は東洋のを粉ふんぼん本にしつといへど、染いだしたる草花などの色は、我邦くになどのものに似もやらず。されどドレスデンの宮には、陶ものの間まといふありて、支那シナ日本の花瓶はながめの類たぐいおほかた備そなわれりとぞいふなる。国王陛下へいかにはいま始めて

謁見す。すがた貌やさしき白髪おきなの翁おきなにて、ダンテの『神曲』訳したまひきといふヨハン王のおん裔すえなればにや、応接いと巧たくみにて、「わがザックセンに日本の公使置かれむをりは、いまの好よしみにて、おん身の来こむを待たむ、」など懇ねもに聞きえさせ玉ふ。わが邦にては旧ふるきよしみある人をとて、御使おんつかい撰えらばるるやうなる例ためしなく、かかる任に当るには、別に履歴ふりなうては協かなはぬことを、知ろしめさぬなるべし。ここにつどへる将校百三十余人の中にて、騎兵の服着たる老将官の貌かたちきはめて魁偉かゐいなるは、国务大臣フアブリス伯なりき。

夕暮に城にかへれば、少女おとめらの笑ひさざめく声、石門の外とまで聞ゆ。車停むるところへ、はや馴れたる末の姫走り来て、「姉君たち『クロケット』の遊あそびしたまへば、おん身も夥なかりたまはずや、」とわれに勧めぬ。大隊長、「姫君の機嫌損じたまふな。われ一個人にとりては、衣脱ころもぎかへて憩いこふべし。」といふをあとに聞きなして随したが行くに、尖塔ピラミッドの下の園にて姫たちいま遊の最中もなかなり。芝生のところどころに黒がねの弓伏せて植ゑおき、靴くつの尖さきもて押へたる五色ごしきの球たまを、小槌こづち揮ふるひて横よこ様に打ち、かの弓の下をくぐらするに、巧たくみなるは百に一つを失はねど、拙つたなきはあやまちて足など撃ちぬとてあわてふためく。われも正劍解せいけんいてこれに雑り、打てども打てども、球あらぬ方かたへのみ飛ぶぞ本意ほんいなき。姫たち声を併せて笑ふところへ、イイダ姫メエルハイムが肘ひじに指ゆび尖掛さきけてかへりしが、うち

解けたりとおもふさまも見えず。

メエルハイムはわれに向ひて、「いかに、けふの宴おもしろかりしや、」と問ひかけて答を待たず、「われをも組に入れ玉へ、」と群のかたへ歩みよりぬ。姫たちは顔見あはせて打笑ひ、「あそびには早倦はやうみたり、姉ぎみと共にいづくへか往ゆきたまひし、」と問へば、「見晴らしよき岩角わたりまでゆきしが、この尖ピラミッド塔には若しかず、小こ林ばやしぬしは明日わが隊とともにムツチエンのかたへ立ちたまふべければ、君たちの中にて一人塔の顛いただきへ案内し、粉こなひき車のあなたに、瀟きしや車の烟見けぶりゆるところをも見せ玉はずや、」といひぬ。

口疾くときすゑの姫もまだ何とも答へぬ間に、「われこそ」といひしは、おもひも掛けぬイダ姫なり。物おほくいはぬ人の習ならいとて、遽にわかに出いだししこと葉と共に、顔あかさと赤あかめしが、はや先に立ちて誘いざなふに、われは訝いぶかりつつも随まひ行きぬ。あとにては姫たちメエルハイムがめぐりに集まりて、「夕餉ゆうけまでにおもしろき話一つ聞かせ玉へ、」と迫りたりき。

この塔は園に向きたるかたに、窪くぼみたる階きざはしをつくりてその顛たいらを平ひらにしたれば、階段をのぼりおりする人も、顔に立ちたる人も下より明あきらかに見ゆべければ、イダ姫が事もなくみづから案内せむといひしも、深あやく怪あやしむに足らず。姫はほとほと走るやうに塔の上のぼりの口くちにゆきて、こなたを顧かへみれば、われも急いそぎて追お付き、段の石をば先に立ちて踏ふみはじめぬ。

ひと足遅れてのぼり来る姫の息促りて苦しげなれば、あまたたび休みて、漸う上にいたりて見るに、ここはおもひの外に広く、めぐりに低き鉄欄干をつくり、中央に大なる切石一つ据ゑたり。

今やわれ下界を離れたるこの塔の顛にて、きのふラアゲキツツの丘の上より遙に初対面せしときより、怪しくもここを引かれて、いやしき物好にもあらず、いろなる心にもあらねど、夢に見、現におもふ少女と差向ひになりぬ。ここより望むべきザックセン平野のけしきはいかに美しくとも、茂れる林もあるべく、深き淵もあるべしとおもはるるこの少女が心には、いかでか若かむ。

険しく高き石級をのぼり来て、臉にさしたる紅の色まだ褪せぬに、まばゆきほどなるゆふ日の光に照されて、苦しき胸を鎮めむためにや、この顛の真中なる切石に腰うち掛け、かの物いふ目の瞳をきとわが面に注ぎしときは、常は見ばえせざりし姫なれど、さきに珍らしき空想の曲かなでし時にもまして美しきに、いかなればか、某の刻みし臺上の石像に似たりとおもはれぬ。

姫はこと葉忙しく、「われ君が心を知りての願あり。かくいはばきのふはじめて相見て、こと葉もまだかはさぬにいかでと怪み玉はむ。されどわれはたやすく惑ふものにあらず。

君演習済みてドレスデンにゆき玉はば、王宮にも招かれ國務大臣の館やかたにも迎へられ玉ふべし。「といひかけ、衣の間より封じたる文ふみを取出でてわれに渡し、「これを人知れず大臣の夫人に届け玉へ、人知れず、」と頼みぬ。大臣の夫人はこの君の伯母御おぼごにあたりて、姉君さへかの家にゆきておはすといふに、始めて逢へること国くにびと人の助を借らでものことなるべく、またこの城の人に知らせじとならば、ひそかに郵便に附しても善からむに、かく気をかねて希有けうなる振舞したまふを見れば、この姫こころ狂ひたるにはあらずやおもはれぬ。されどこはただしばしの事なりき。姫の目は能よくものいふのみにあらず、人のいはぬことをも能く聞きたりけむ。分い疏わのやうに語を継つぎて、「フアブリス伯爵夫人のわが伯母なることは、聞きてやおはさむ。わが姉もかしこにあれど、それにも知られぬを願ひて、君が御助みたすけを借らむとこそおもひ侍れはべ。この人への心づかひのみならば、郵便もあめれど、それすら独出ひとりづること稀なる身には、協かなひがたきをおもひやり玉へ。」といふに、げに故あることならむとおもひて諾うべなひぬ。

入日は城門近き木立より虹の如く洩りたるに、河霧たち添ひて、おぼろけになる頃塔を下げば、姫たちメエルハイムが話ききはててわれらを待受け、うち連れて新あらたにともし火をかがやかしたる食堂に入りぬ。こよひはイイダ姫きのふに變りて、楽しげにもてなせば、

メエルハイムが面にも喜のいろ見えにき。

あくる朝ムツチエンのかたをこころざしてここを立ちぬ。

秋の演習はこれより五日ばかりにて終り、わが隊はドレスデンにかへりしかば、われはゼエ・ストラアセなる館をたづねて、さきにフォン・ビュロオ伯が娘イイダ姫に誓ひしことを果さむとせしが、固よりところの習にては、冬になりて交際の時節来ぬ内、かかる貴人に逢はむことたやすからず、隊附の士官などの常の訪問といふは、玄関の傍なる一間に延かれて、名簿に筆染むることなればおもふのみにて罷みぬ。

その年も隊務いそがはしき中に暮れて、エルベがは上流の雪消にはちす葉の如き氷塊、みどりの波にただよふとき、王宮の新年はなばなく、足もと危き蟬磨きの寄木を踏み、国王のおん前近う進みて、正服うるはしき立姿を拝し、それよりふつか三日過ぎて、国務大臣フォン・ファブリス伯の夜会に招かれ、オーストリア、壞太利、バワリア、北亜米利加などの公使の挨拶畢りて、人々こほり菓子に匙を下す隙を覗ひ、伯爵夫人の傍に歩寄り、事のもと手短に陳べて、首尾好くイイダ姫が文をわたしぬ。

一月中旬に入りて昇進任命などにあへる士官とともに、奥のおん目見えをゆるされ、正服着て宮に参り、人々と輪なりに一間に立ちて臨御を待つほどに、ゆがみよろぼひたる

式部官に案内せられて妃出でたまひ、式部官に名をいはせて、ひとりびどりこと葉を掛け、手袋はづしたる右の手の甲に接吻せしめ玉ふ。妃は髪黒く丈低く、褐いろの御衣あまり見映せぬかはりには、声音いとやさしく、「おん身は仏蘭西の役に功ありしそれがしが族なりや、」など懇にもものし玉へば、いづれも嬉しとおもふなるべし。したがひ来し式の女官は奥の入口の闕の上まで出で、右手に摺みたる扇を持ちたるままに直立したる、その姿いといと気高く、鴨居柱を欄にしたる一面の画図に似たりけり。われは心ともなくその面を見しに、この女官はイイダ姫なりき。ここにはそもそも奈何して。

王都の中央にてエルベ河を横ぎる鉄橋の上より望めば、シユロス・ガツセに跨りたる王宮の窓、こよひは殊更にひかりかがやきたり。われも数には漏れで、けふの舞踏会にまねかれたれば、アウグスツスの広こうちに余りて列をなしたる馬車の間をくぐり、いま玄関に横づけにせし一輛より出でたる貴婦人、毛革の肩掛を隨身にわたして車箱の裡へかくさせ、美しくゆひ上げたるこがね色の髪と、まばゆきまで白き領とを露して、車の扉開きし劍佩びたる殿守をかへりみもせで入りし跡にて、その乗りたりし車はまだ動かず、次に待ちたる車もまだ寄せぬ間をはかり、槍取りて左右にならびたる熊毛蓋の近衛卒の前を過ぎ、赤き氈を一筋に敷きたる大理石の階をのぼりぬ。階の両側のところどころ

には、黄羅紗キヲシヤにみどりと白との縁取りたる「リフレエ」を着て、濃紫コヅラサキの袴はかまを穿いたる男、項うなじを屈かがめて瞬またたきもせず立ちたり。むかしはここに立つ人おのおの手燭てしよく持つつ習なりしが、いま廊下、階段に瓦斯燈ガスとう用もちゐることとなりて、それは罷やみぬ。階の上なる広間よりは、古いにしへしえぶりにしえぶりに燭台つりしよくだいの黄蠟おうろうの火遠く光の波を漲みなぎらせ、数知らぬ勲章、肩じるし、女服の飾などを射て、祖先よよの油画あぶらえの肖像の間に挟かまれたる大鏡に照てりかえ反かえされたる、いへば尋常よのつねなり。

式部官しきぶくわんが突きく金総きんぶさついたる杖つえ、「パルケツト」の板いたに触ふれてとうとうと鳴りひびけば、天鵝絨ビロードばりの扉かど一時に音もなくさとあきて、広間のまなかに一条ひとすじの道おのづから開け、こよひ六百人と聞えし客、みなくの字なりに身を曲げ、背の中ほどまでも截きりあけてみせたる貴婦人うなじの項うなじ、金糸きんしの縫ぬい模様もようある軍人の襟えり、また明色ブロンドの高髻たかまげなどの間を王族の一行よぎ過よりたまふ。真先まきさきにはむかしながらの巻毛まきげの大仮髪おおかみをかぶりたる舎人とねり二人、ひきつづいて王妃きさき両陛下、ザックセン、マイニンゲンのよつぎの君夫婦、ワイマル、シヨオンベルヒの両公子、これにおもなる女官にようくわん数人したか随したがへり。ザックセン王宮の女官はみにくしといふ世の噂うわさむなしからず、いづれも顔立かおだちよからぬに、人の世の春さへはや過ぎたるが多く、なかにはおい皺しわみて肋あはら一つ一つに数ふべき胸を、式なればえも隠いさで出いだしたるなどを、額越ひたいご

しにうち見るほどに、こころまち心待せしその人は来ずして、一行はや果てなむとす。そのとき
 まだ年若き宮女一人、しんがり殿めきてゆたかに歩みくるを、それかあらぬかと打仰げば、これ
 なんわがイイダ姫なりける。

王族広間の上かみのはてに往着ゆきつき玉ひて、国々の公使、またはその夫人などこれを囲むとき、
 かねて高廊への上に控へたる狙撃聯隊の樂人がひと声鳴らす鼓つづみとともに「ポロネエズ」とい
 ふ舞まいはじまりぬ。こはただおのおの右手めでにあひての婦人の指をつまみて、この間をひと周
 するなり。列のかしらは軍装したる国王、紅衣のマイニンゲン夫人を延ひき、つづいて黄絹きぎぬ
 の裾引衣すそひきころもを召したる妃かんむりにならびしはマイニンゲンの公子なりき。僅わずかに五十対ついでばかりの
 列めぐりをはるとき、妃は冠かんむりのしるしつきたる椅子よに倚りて、公使の夫人たちを側そばにをら
 せたまへば、国王向ひの座敷なる骨牌卓カルタづくえのかたへうつり玉ひぬ。

この時まことの舞踏はじまりて、群客たちこめたる中央の狭きところを、いと巧たくみにめぐ
 りありくを見れば、おほくは少年士官の宮女たちをあひ手にしたるなり。わがメエルハイ
 ムの見えぬはいかにとおもひしが、げに近衛このえならぬ士官はおほむね招かれぬものと悟り
 ぬ。さてイイダ姫の舞ふさまいかにと、芝居ひいきにて最良わぎの俳優おぎみるこちしてうち護まもりた
 るに、胸にさうびの自然花こずえを梢こずえのままに着けたるほかに、飾といふべきもの一つもあらぬ

水色ぎぬの裳裾もすそ、狭き間をくぐりながち撓たわまぬ輪わを画えがきて、金剛石こんごうせきの露こぼ瀾らんるるあだし貴人の服のおもげなるを欺あざむきぬ。

時遷うつるにつれて黄蠟わうろうの火は次第すみに炭けの気におかされて暗うなり、燭しよくるい涙なながくしたたりて、床ゆかの上には断ちぎれたる紗うすぎぬ、落おちたるはな片ひらあり。前座敷まへざしきの間食卓びじゅつふえにかよふ足やうやう繁さかくなりたるをりしも、わが前をとほり過ぐるやうにして、小首こくびかたぶけたる顔かほこなたへふり向け、なかば開けるまひ扇あうぎおとがに頤おのわたりを持たせて、「われをばはや見忘れやし玉ひつらむ、」といふはイイダ姫なり。「いかで」といらへつつ、二足ふたあし三足みあし附つきてゆけば、「かしこなる陶物すえものの間見またまひしや、東洋産とうやうさんの花はな瓶がめに知らぬ草木鳥獸くわくもくじゆなど染めつけたるを、われに釈ときあかさむ人おん身の外ほかになし、いぎ、」といひて伴ばんひゆきぬ。

ここは四方よもの壁かべに造付けたる白石はくしやくの棚たのに、代々よよの君が美術びじゆつに志こころありてあつめたまひぬる国々のおほ花瓶けいびん、かぞふる指ゆびいとなきまで並べたるが、乳ちの如く白しろき、琉璃るりの如く碧あおき、さては五色ごしきまばゆき蜀しよつぎん錦きんのいろなるなど、蔭かげになりたる壁より浮うきいでて美うはし。されどこの宮居みやいに慣れたるまらうどたちは、こよひこれに心留こころどむべくもあらねば、前座敷まへざしきにゆきかふ人のをりをり見ゆるのみにて、足をとどむるものほとほとなかりき。

緋ひの淡たんき地ぢにおなじいろの濃のきから草織くさおり出したる長椅子ながいすに、姫は水いろぎぬの裳ものけだ

かきおほひだの、舞の後ながらつゆくす頰れぬを、身をひねりて横よこぎまに折りて腰掛こしかけ、斜ななめに中の棚の花瓶けいびんを扇あふぎの尖さきもてゆびさしてわれに語りはじめぬ。

「はや去年こぞのむかしとなりぬ。ゆくりなく君を文づかひにして、あや申すたつきを得ざりければ、わが身の事いかにおもひとり玉ひけむ。されど我を煩惱ぼんのうの闇路やみじよりすくひいで玉ひし君、心の中には片時かたときも忘れ侍はべらず。」

「近ちか比ひら日本の風俗書きしふみ一つ二つ買はせて読みしに、おん国にては親の結ぶ縁ありて、まことの愛知らぬ夫婦多しと、こなたの旅人のいやしむやうに記したるありしが、こはまだよくも考へぬ言ことにて、かかることはこの欧羅巴ヨーロッパにもなからずやは。いひなづけするまでの交際つきあひ久しく、かたみに心の底まで知りあふ甲斐かいは否いなとも諾うともいはるる中なかにこそあらめ、貴族仲間にては早くより目上の人にきめられたる夫婦、こころ合はでも辞いなまむよしなきに、日々にあひ見て忌むこころ飽あくまで募つりたる時、これに添なはする習ならりとはことわりなの世や。」

「メエルハイムはおん身が友なり。悪しといはば弁護もやしたまはむ。否、我とてもその直すぐなる心を知り、貌かたちにくからぬを見る目なきにあらねど、年頃つきあひしすゑ、わが胸にうづみ火ほどのあたたまりも出来いでず。ただ厭いとふにはゆるは彼方あなたの親切にて、ふた親のゆる

しし交際の表、かひな借さるることもあれど、唯二人になりたるときは、家も園もゆくかたもなう鬱陶いぶせく覚えて、こころともなく太き息せられても、かしら熱くなるまで忍びがたうなりぬ。何ゆゑと問ひたまふな。それを誰か知らむ。恋ふるも恋ふるゆゑに恋ふるところ聞け、嫌ふもまたさならむ。」

「あるとき父の機嫌好きを覗うかがい得えて、わがくるしさいひ出でむとせしに、気色を見てなかば言はせず。『世に貴族と生れしものは、賤しずやまがつなどの如くわがままなる振舞、おもひもよらぬことなり。血の権の贄にえは人の権なり。われ老たれど、人の情忘れたりなど、ゆめな思ひそ。向ひの壁に掛けたるわが母君の像すがたを見よ。心もあの貌かおのやうに厳いしく、われにあだし心おこさせ玉はず、世のたのしみをば失ひぬれど、幾百年の問いやしき血ひ一と滴しずくまぜしことなき家の誉ほまれはすくひぬ。』といつも軍人ぶりのこと葉つきあらあらしきに似ぬやさしさに、兼ねてといはむかく答へむとおもひし略てだて、胸にたたみたるままにてえもめぐらさず、唯心ただのみ弱うなりてやみぬ。」

「固もとより父に向ひてはかへすこと葉知らぬ母に、わがこころ明あかして何にかせむ。されど貴族の子に生れたりとて、われも人なり。いまいましき門閥、血統、迷信の土くれと看破みやぶりては、我胸の中に投入るべきところなし。いやしき恋にうき身躰やつさば、姫ごぜの恥ともな

らめど、この習慣の外にいでむとするを誰か支ふべき。『カトリック』教の国には尼あまになる人ありといへど、ここ新教のザックセンにてはそれもえならず。そよや、かの羅馬ローマキ教の寺にひとしく、礼知りてなさけ知らぬ宮の内こそわが冢穴つかあななれ。」

「わが家もこの国にて聞ゆる族うからなるに、いま勢ある國務大臣フアブリス伯とはかさなる好よしみあり。この事おもてより願はばいと易やすからむとおもへど、その叶かなはぬは父君の御心みこころうごかしがたきゆゑのみならず。われ性さがとして人とともに歎なげき、人とともに笑わらひ、愛憎二つの目もて久しく見らるることを嫌へば、かかる望をかれに伝へ、これにいひ継がれて、あるは諫いさめられ、あるは勧められむ煩わづらはしきに堪たへず。いはんやメルハイムの如く心浅々しき人に、イイダ姫嫌ひて避けむとすなどと、おのれ一人にのみ係ることのやうにおもひ做なされむこと口惜くちおしからむ。われよりの願と人に知られで宮づかへする手立てだてもがなともひ悩むほどに、この国をしばしの宿にして、われらを路傍の岩木などのやうに見もすべきおん身が、心の底にゆるぎなき誠をつつみたまふと知りて、かねて我身いとほしみたまふフアブリス夫人への消しょうそ息、ひそかに頼みまつりぬ。」

「されどこの一件ひとくだりのことはフアブリス夫人ころに秘めて族うからにだに知らせ玉はず、女官の鬨けつ員いんあればしばしの務つとめにとて呼寄せ、陛下へいかのおん望のぞみもだしがたしとて遂にとどめ

られぬ。」

「うき世の波にただよはされて泳ぐ術知らぬメルハイムがごとき男は、わが身忘れむとてしら髪生やすこともなからむ。唯痛ましきはおん身のやどりたまひし夜、わが糸の手とどめし童なり。わが立ちし後も、よなよな纜をわが窓の下に繋ぎて臥ししが、ある朝羊小屋の扉のあかぬにこころづきて、人々岸边にゆきて見しに、波虚しき船を打ちて、残れるはかれ草の上なる一枝の笛のみなりきと聞きつ。」

かたりをはるとき午夜の時計ほがらかに鳴りて、はや舞踏の大休となり、妃はおほとのごもり玉ふべきをりなれば、イイダ姫あわただしく坐を起ちて、こなたへ差しのぼしたる右手の指に、わが唇触るとき、隅の觀兵の間に設けたる夕餉に急ぐまらうど、群立ちてここを過ぎぬ。姫の姿はその間にまじり、次第に遠ざかりゆきて、をりをり人の肩のすきまに見ゆる、けふの晴衣の水いろのみぞ名残なりける。

青空文庫情報

底本：「舞姫・うたかたの記 他三篇」岩波文庫、岩波書店

1981（昭和56）年1月16日第1刷発行

1992（平成4）年3月5日第21刷発行

底本の親本：「鷗外全集第二巻」岩波書店

1971（昭和46）年12月刊

初出：「新著百種 第12号」吉岡書籍店

1891（明治24）年1月28日

入力：kompass

校正：土屋隆

2006年3月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

文づかひ

森鷗外

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>